学校水族館にかける夢

河野小学校　八田七郎右ヱ門

1　海に生きてきた河野村

「海は本村の宝庫なり」古くからある校訓の冒頭のことばです。遠く松前船の時代から戦後の今日に至るまで海による生産によつて親子のつながりも人々の結束も、物心両面の支えがなされてきたと言えましよう。

赴任して８年間、ほんとに海に生きてきたんだなということをひしひしと感得させられました。過疎化現象は免るべくもなかつたが、他府県に出ていた人もやはり生れ故郷が安住の地として、いわゆるＵターン現象で若い人がとみに増加し、村の各種競技も賑かにできるようになつた。しかし、定置網漁法のみで、しかも資源の枯渇状態の今日である時、アワビやノリ、ワカメの養殖がなされるけれども、海岸の状態は大規模化を許さない。生活を海のみに託しきるわけにはいかないが、やはり河野村は海に依存しなければならないと考えています。訪れられるどなたもが感嘆される大自然のおおらかさの中に育ち生きてほしいと願うわけであります。大自然のナゾ、それは海のナゾです。赴任当初、河野の子は、さぞかし海の生物をよく知つていると思つていたが、水はそう簡単に子どもたちを寄せつけず、予想ほどには知つていないようでした。ガンジヤは知つていてもバフンウニは知らなかつたり、サンゼ、ツメ、ベコンタレであつてそれらの形態、生態といつたものへの観察眼も少ないようです。

理科学習が与えられた教材や指示による観察、実験でなく身辺の事物や現象へ働きかけてその摂理に驚きの眼を開かせたいと願つている小生が考えついたのは「ぼくらの住んでいる海つて、こんなんだな」と広く見させる水族館だつたのです。

2　学校水族館の構想

郷土を知り、海に生きる愛着を持つ一つの方途として学校水族館の計画については、村当局も村教育委員会もかねてからの念願で大いに賛成してくださつたのです。

(1)　校　内　設　備

- 小型飼育水槽……貝類（アワビ、サザエ、タマキビ、カサガイ、レイシ、イボニシ、クボガイ、イシダタミ）
  小動物　（イソギンチヤク、アメフラシ、ウミウシ、ヒザラガイ、ヤドカリ、ウチワエビ、セミエビ、ヒトデ、ウニ類、ヒドロ虫類、ヤギ類、海綿類）
  種名記述不揃
- 予措水槽……　陸上げされたものについての予備飼育
- 大型水槽……　設備一式　　１５万円（昭４７）

(2) 臨海学習場

学校前の305号線拡張工事に付帯して浜への階段を村で設計され、子どもの学習場として配意くださつたことは非常に有難く感じました。ちようど、この場は30cmほどの干満で見えかくれする岩棚や、大小の岩礁、砂利浜があつて海浜総合学習場としては恰好の場所です。
一般の釣客、浴客にも利用される場所なので、標札により、子どもが学習の場として利用するので、美しさを保つご協力をお願いし生息の案内もしています。日本列島そつくりのニホングリや二、三の岩へ渡る仕組みも考えています。

(3) 屋外飼育場

統合校舎建設に付随してプールも含まれており、その中に海水を引き上げての海産生物飼育場も含まれていたが、早急な実現は無理な状態となつたけれども、村当局が、すでに考えていてくださつたことに強味があると喜んでいます。それはあくまでも箱庭であるかも知れないが関心を持ち自ら探り出した学校の箱庭が、一生の語り草となることを望んでいるわけです。

海水を使用することについては、濁れや浮遊有機物で、いろいろな障害があろうと思います。経験では濾過してもすぐ腐つてしまい、屋内水槽では人工海水を使つていますが、海水の利用法についてご指導願えれば幸甚です。坂井郡刈安山自然の森では中腹に貯えたタンクから水圧利用で頂上まで揚水していますが、海水について約20mをこのような仕組みで小電力で揚水できるかどうかもまだ分つていません。

とにかく海国日本といいますが、海を目のあたりにして生きている子どもに海の自然を、海が育んでいる大きさをより確かな観察眼で、探りとつてくれる子をと願つています。

3 子どもとの観察

ともに観察したというより、子どもに教えられたといつた方がよいかも知れません。ぼくらの海の魚が、目の前に置かれたとき既知のものも未知のものも喜んで見ているようでしたが、精しい観察は一朝には求められず、水槽の前に立つての対話や日記、観察ノートから糸をたぐり出しメモ用紙による通信により、観察に喜びを覚えてきたようでした。
中には「チエ(タイ)がへえつたな」「ベコンダ(アメフラシ)がいるな」ですませてしまう子もいるが、子どもの観察事項をテレビカメラで教室に放映して確めと、参加を奨めてきました。

二、三の例を述べてみます。

(1) ベラ(ニシキベラ)

C ベラは砂(砕サンゴ)にもぐり、ねるんです。

T ねるつて 目をふさぐの? 横になつているの?

C 横になつてはいるが、目はまんまるだから開けたままです。

(なるほど 横になつていました。図鑑によつてこんな習性を持つていることを知りました。)

(2) カレイとヒラメ

C　二つとも違うところがないんじゃないか、見たところ色も形ももようも同じようだ。
目玉も同じく二つ並んでついている。
横になつて泳ぐことや底にへばりついているのも同じだ。

T……　のように見えるけれども、名前が違うのだからどこか変つた特徴があるはずだ。
もう少し精しく細かくスケッチをするつもりで見なさい。ヒレも目玉も、口も、エラも
そうすると大発見をするよ。
（エラが対称の位置にあるスケッチはしたけれど、その差違は発見されず、同じ種類の
魚をまちがつているのではないかということでした。）

T　ベラはタテになつて（背中を上に）泳ぎ、横になつてねるが、いつも横になつている
カレイやヒラメをタテにして考えてみなさい。
背中はどちらがわ

C　たてにするにはエラが下だから、この二つをタテにすると……
アツ、こちらは左側がくろい、こちらは右側だ。同じに見えたけれど右にねたのと、左に
ねたのとの大違いだ。けれども、どちらがカレイだろう。

T　じやあ、図鑑を見よう―― 左がくろいのがヒラメ、右のくろいのが

C　カレイ

T　それで、この区別を「左ヒラメ、右カレイ」と覚えたね先生は。
ところで、ヒラメもカレイも子どもの時は、タテに泳いで、目も両方についているのが、
大きくなるに従つてヨコに泳ぐようになり、目玉も片寄つてこのようになるんだよ。ベ
ラが横になつてねるというが、右下か左下かどちらだろう。（まだ課題）

(3) ウニ、ヒトデの管足

(4) アワビ、サザエの観察とカタツムリ

(5) 魚のなかまに、モンガラカワハギ、マダイ、チダイ、イシガキダイ、ハコフグ、クサフグ（デボ、デンブク）、ウミヘビ、カワハギ、ウマヅラハギ、ゴンズイ、イツトウダイ、マツカサウオ、ギンカガミ、イシダイ、クロダイ、ニシキベラ、マトダイ、ハタタテダイ、イトヨ、

(6) 海岸産動物に　イソカイメン、ウミカラマツ、カツオノカンムリ、イソバナ、アカヤギ、イソギンチヤク類、ホシムシ類、ウチワエビ、セミエビ、ヤドカリ類、トラフカラツパ、コブカラツパ、キメンガニ、テナガコブシガニ、コブシガニ、ミズヒキガニ、ヒシガニ、ケアシガニ、エンコウガニ、ヒラツメガニ、ヒザラガイ、アメフラシ、アオウミウシ、アオリイカ、タコ、イトマキヒトデ、クモヒトデ、オキノテズルモズル、バフンウニ、アカウニ、ムラサキウニ、タコノマクラ、

(7) 貝のなかまに　アワビ、サザエ、レイシ、ベツコウザラ、クボガイ、コシダカガンガラ、クロズケガイ、イシダタミ、アラレタマキビ、ウミニナ、カニモリガイ、バイ、ナガニシ、テングニシ、ムラサキイガイ、

以上のものについて、それなりの観察を続け、水揚げされた死魚とは異つた生きた魚に接しられたようで、種名よりも生態、形態に興味を持つてきたようであります。

資料については、子どもも親も漁をする人の多くが、協力してくださつて話題をにぎわし、漁に関係のない魚についても語られるようになり、図鑑の利用も上達しています。分布について、北上しているのかどうかの手がかりをほしいと思います。イトヨの記録の充実、養殖海藻の記録など郷土の自然、産物を知り、海に育つ太陽の子らのたくましい姿をこいねがうものであります。

拙い歩みでありまして、ささやかな御報告にしかなりませんが、希望だけは大きく持つています。同好諸兄の御指導御助言をお願いします。